

Feel the JIHS Plus

CONTENTS

- 2 なるほど感染研！見えない世界をのぞいてみよう
国立感染症研究所 村山庁舎一般公開
- 3 NCGM 人間ドックセンター開設 10 周年
吉村作治氏 特別記念講演会
- 3 とっとりフラワーガーデン開設
- 4 子どものころを支えるための情報発信
- 5 日本感染症学会創立 100 周年記念式典
- 6 JIHS 英文機関誌 Global Health & Medicine の Journal Impact
Factor が 2.3 に上昇
- 7 JIHS ベトナム連携オフィス（ハノイ医科大学）を開設
- 8 厚生労働省委託事業：感染症危機管理リーダーシップ人材育成事業
令和 8 年度「感染症危機管理リーダーシップ研修（長期）」
- 10 新生 JIHS が支えるアジア太平洋地域の健康危機管理
- 11 理事長と若手の交流会を開催
- 12 「世界の看護の現在地と未来 -SoWN2025 からみる世界と日本の看護-」
を開催
- 12 セラピードッグ訪問



なるほど感染研！見えない世界をのぞいてみよう 国立感染症研究所 村山庁舎一般公開

JIHS 国立感染症研究所では、一般の皆様や関係者に研究所の役割や活動への理解を深めていただくため、戸山キャンパス（東）と村山キャンパスで、それぞれ年1回「一般公開」を開催しています。このうち、村山キャンパスの一般公開では、特に近隣の小・中学生に科学の楽しさを感じてもらえるよう、研究で使用する器具や実験方法、病原体を安全に取り扱うための仕組みなどを、体験を通して学べる企画を数多く用意しています。

例年は7月に開催していますが、近年の厳しい暑さを考慮し、今年度は6月27日に開催しました。当日は2つの台風が関東地方に接近する予報もあり、開催が危ぶまれましたが、天候が大きく崩れることなく、280名の方にご来場いただきました。

各会場では、実験器具を使った体験、感染症

に関する講演やゲーム、顕微鏡を用いた観察、白衣姿での記念撮影など、多彩な企画を実施しました。会場には多くの子どもたちや家族連れが訪れ、「とても楽しく学べました」「来年も楽しみにしています」といったうれしい声が寄せられました。当日は、国土典宏理事長、脇田隆字副理事長、四柳宏理事、俣野哲朗所長らも参加し、終始活気にあふれた一日となりました。

【戸山庁舎一般公開のお知らせ】

2026年10月24日（土）13:00～17:00、戸山キャンパス（東）の一般公開を行います。イベント・体験を通じて、様々な部署のお仕事を体験できます。ぜひご家族やご友人とご一緒にお越しください。



なるほど感染研！見えない世界をのぞいてみよう

感染研 村山庁舎 一般公開

2026 6/27(土) 13:00～17:00
最終入場 16:30

入場無料

アクセス
＜公共交通機関でお越しの場合＞
・西武拝島線/多摩モノレールの
玉川上水駅より立川バス村山団地
行きで「村山団地」下車
・立川バス 武蔵村山病院行きまたは
イオンモール行きで「西東京街道口」
下車

やむを得ず、中止することもあるので、
開催前に最新の情報をご確認ください。

問合せ先
国立健康危機管理研究機構 国立感染症研究所・村山庁舎
〒208-0011 東京都武蔵村山市学園 4-7-1 TEL: 042-561-0771 FAX: 042-565-3315
E-mail: murayama-info2026@nih.go.jp HP: <https://www.niid.jihs.go.jp>
録音・録画はできません。取材は事前に申請し、許可されたものに限りします。

イベント内容や詳しい案内は二次元バーコードを見てね！



NCGM人間ドックセンター開設10周年 吉村作治氏 特別記念講演会

7月10日、人間ドックセンター開設10周年を記念した講演会を開催し、当日は多くの来場者でにぎわいました。東日本国際大学総長・早稲田大学名誉教授の吉村作治氏に、「古代エジプトの医療と健康管理」をテーマにご講演いただきました。豊富な発掘調査の経験を交えながら古代エジプトにおける高度な医療技術や健康観を分かりやすく紹介いただき、古代エジプトに思いをはせつつ、日頃の健康を見つめ直す貴重な時間となりました。

当センターでは、病気の早期発見・早期治療を目指し、充実した人間ドックと各種オプション

検査を提供しています。10周年を機に、職員や地域住民の健康づくりへの貢献をさらに進め、これからも定期的な受診を呼びかけてまいります。



とっとりフラワーガーデン開設

5月21日、国際医療センターにある国際庭園に「とっとりフラワーガーデン」が開設されました。JIHS 理事でもある平井伸治鳥取県知事のご配慮により実現したもので、庭園には鳥取県産で皇室ゆかりのバラを含む様々な草花が植えら

れました。

國土典宏理事長は、日頃から庭園を管理し、今回の植栽にも尽力をいただいたボランティアの方々に謝辞と拍手を贈り、この庭園に今後も四季折々の花が咲くことを期待していると述べました。





子どものこころを支えるための情報発信

寄稿

国立国府台医療センター 子どものこころ総合診療センター
児童精神科診療科長 宇佐美 政英



私たちの児童精神科は、1948年、当時の厚生省の所管国立国府台病院に開設されて以来、国内最古の歴史を歩んできました。長い年月の中で子どもたちを取り巻く環境は変化し、いまや不登校は35万人超、小中高生の自殺は530人超、児童虐待の相談は22万件と、いずれも過去最多です。私たちはそんな子どものこころを、医師・看護師・心理師・ソーシャルワーカーなど多職種がチームを組み、一体となって支えることが大切と考えています。また、私たち児童精神科の仕事は、診察室の中だけにとどまりません。子どもと家族に届く「ことば」を発信し、社会に還元することも大切な使命です。そこで今回は私たちがその「ことば」を届けるために取り組んでいる活動や実績の一部をご紹介します。

■メディアでの情報発信

7月20日には、日本経済新聞で児童精神科医療の現状と地域差をテーマにした記事が掲載されました。

8月25日には、NHK Eテレ「視点・論点」で「夏休み明けの子どものメンタル」をテーマにお話ししました。夏休みが終わりに近づくこの時期に、子どもの気持ちの変化にどう気づき、どう支えればよいのか、家庭でできることや受診の目安を専門の立場からお伝えしています（番組記事は「視点・論点」のホームページからご参照いただけます）。

9月11日放送のNHKラジオ「マイあさ!」で児童精神科専門医の不足と支援の現状について取材を受けました。

■絵本『かいじゅうスプルはこうやって げんきをとりもどした』を監修

7月発売の絵本『かいじゅうスプルはこうやってげんきをとりもどした』（作・絵：沖本敦子、パイインターナショナル）を監修しました。SNSでの評価や他者との比較に疲れ、「こころの充電」が切れてしまったかいじゅうのスプルが、安心できる場所での休養や友だちとの関わりの中で、小さなステップを踏んで元気を取り戻していく物語です。巻末には、子ども向けと保護者向けの解説も添えています。



■災害時の子どものこころのケア

東日本大震災後、私たちは石巻市での子どものこころのケアに長く携わってきました。その経験を生かし、国立国府台医療センターのホームページでは「障害を抱え



特別な支援が必要な子どもと、その家族のための緊急時対応準備マニュアル」を公開しています。今年7月の熊本県での地震の際にも、JIHSの公式SNSで改めて紹介しました。

■「うつ病診療ガイドライン2025」

— 児童・思春期うつ病を担当

2026年6月発行の、日本うつ病学会監修『うつ病診療ガイドライン2025』（医学書院）において、第4章「児童・思春期うつ病」の執筆を担当しました。臨床に携わる皆さまの診療の一助となれば幸いです。



▶掲載先はこちら
[201409manual.pdf](https://www.jihs.go.jp/201409manual.pdf)



■児童・思春期精神医療における多職種連携の 推進マニュアル(MENTOR)

厚生労働科学研究費補助金（障害者政策総合研究事業）により、「児童・思春期精神医療における多職種連携の推進マニュアル(MENTOR)」を作成しました。本マニュアルは、医師や看護師、心理職、福祉職、教育職などが連携し、子どもと家族を支えるための実践的指針を示したものです。

- ・児童・思春期精神医療における多職種連携の推進マニュアル(MENTOR)

https://kohnodai.jihs.go.jp/subject/100/100/manual_mentor.pdf

- ・児童・思春期精神医療における多職種連携の推進マニュアル(Q&A)

https://kohnodai.jihs.go.jp/subject/100/100/manual_qa.pdf

- ・児童・思春期精神医療における多職種連携の推進マニュアルの解説(動画)

<https://youtu.be/mxnPlhmuig?si=jv5GB8oZyqDEQmSA>

■PCN Reports Reviewer Awards 2025を受賞

PCN Reports Reviewer Award 2025を受賞しました。本賞は、精神医学の学術誌 *Psychiatry and Clinical Neurosciences Reports* (PCNReports)において、専門的な知識と経験を活かして査読に尽力し、その発展に貢献した査読者に贈られます。

どの活動も、「子どものこころの困りごとを、正しい知識とやさしいことばで支えたい」という想いから生まれています。JIHS国立国府台医療センター児童精神科では、診療・研究・発信の三つの車を、これからも進めてまいります。



日本感染症学会 創立100周年記念式典

5月22日、東京国際フォーラムで日本感染症学会創立100周年記念式典が執り行われました。天皇・皇后両陛下に行幸啓を賜った会場には、厚生労働大臣、文部科学大臣、日本医学会および日本医学会連合の会長、日本医師会会長をはじめ、関係者約500名が出席し、厳かな中にも華やかな式典となりました。

本学会は、大正15（1926）年9月22日に創設された日本伝染病学会を前身とし、昭和49年に改称され今に至ります。

天皇陛下からは、「日本感染症学会は創立以来一貫して、それぞれの時代に問題となった感染症に対して広く取り組み、感染症領域における学術的活動を通じて社会に大きく貢献してこられたと聞いています。特に、令和元年の年末に発生した新型コロナウイルス感染症によるパンデミックにおいては、多くの学術機関・医療機関・行政機関などと協力して、国民の治療や予防に大きく貢献されました」、「今後も、これまでの実績と経験を基に、新たな感染症や次なるパンデミックに備えた研究の進展が図られる



ことが期待されます」と、JIHSにとっても誠にありがたいお言葉を賜りました。

また、5月24日には第100回 日本感染症学会総会・学術講演会および第74回 日本化学療法学会総会 合同学会シンポジウムが開催され、JIHSの医師らが登壇し発表を行いました。

日本感染症学会には、JIHSに所属する多くの医学・医療関係者が参画しています。今回の学術集会でも、JIHSの構成員が多数登壇しました。今後、JIHSにおける研究が学会との連携をさらに深めながら、大きく進展していくことを予感させる素晴らしい機会となりました。



左から：大曲貴夫医師 武井貞治理事 四柳宏理事
賀来満夫医師 倭正也医師 泉川公一医師



左から：大曲貴夫医師 福田哲也薬剤師 金原健人薬剤師
氏家無限医師 石金正裕医師 齋藤哲也医師 武井貞治理事

司会・登壇者の皆様

JIHSの英文機関誌である国際英文学術誌 Global Health & Medicine (GHM) の最新の Journal Impact Factorが2.3となり、前年の1.4から上昇しました。本指標は6月17日に公表された2026年版 Journal Citation Reports (JCR) において示されたものです。

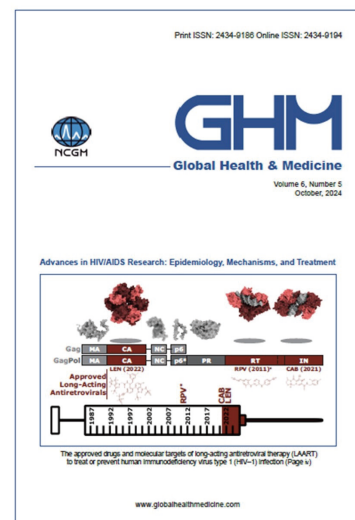
Journal Impact Factorは、学術誌に掲載された論文等の引用状況を示す代表的な指標であり、国際的な可視性や影響力を把握する際の参考に広く用いられています。また、文献データベースScopusの引用指標であるCiteScoreは2.2となっています。

GHMは令和元（2019）年10月に国立国際医療研究センター（NCGM）により創刊され、2025年4月からはJIHSが発行を担う国際英文学術誌です。ナショナルセンター初の英文機関誌として、臨床医学、基礎医学、公衆衛生学、国

際保健学、健康危機管理など、JIHSが関わる幅広い分野において、国際的な情報ネットワークの構築と、質の高いオリジナル研究を発表する場の提供を目指しています。

GHMは隔月で発行され、これまでに400本以上の英文学術論文を掲載し、時宜を得たテーマによる特集号も刊行しています（図）。掲載論文はWeb of Science Core Collection、PubMed/PMC、Scopusなどの主要データベースに収載され、世界中から検索・閲覧が可能です。

今回の Journal Impact Factor の上昇は、GHMに掲載された論文の国際的な可視性と引用実績が着実に高まっていることを示すものであり、JIHSによる国際的な学術情報発信にとって大変意義のある成果です。



（図）最近2年間に発行された特集号の表紙例

左から AI in Medicine (Vol.8, No.3), Global Perspectives on Health Security and Infectious Diseases (Vol.7, No.2), Advances in HIV/AIDS Research: Epidemiology, Mechanisms, and Treatment (Vol.6, No.5)



JIHSベトナム連携オフィス（ハノイ医科大学）を開設

JIHSは、東南アジア・東アジア国際共同臨床研究アライアンス（ARO Alliance for Southeast & East Asia [ARISE]）を主導し、東南アジア・東アジア地域における国際共同臨床研究を推進しています。その一環として、ARISEの加盟施設に連携オフィスを設置し、現地の研究機関との連携体制を構築しています。

この度5か所目の連携オフィスとして、人材育成プログラムや国際共同臨床研究など既にJIHSとの連携実績があり、2025年度にARISEに加盟したハノイ医科大学内に「JIHS連携オフィス」を開設しました。

5月25日、国土典宏理事長と杉浦亙臨床研究センター長は、ハノイ医科大学を訪問し、JIHS連携オフィスオープニングセレモニーを執行了いました。セレモニーでは、これまでのJIHSとハノイ医科大学との連携について報告された後、

在ベトナム日本国大使館の斎藤雅文一等書記官から祝辞をいただきました。その後、フー・トゥ・グエン ハノイ医科大学学長と国土理事長により、JIHS連携オフィスの開設宣言が行われ、ネームプレートの除幕が執り行われました。

JIHSは、今後も感染症を中心とした国際共同臨床研究ネットワークを通じて、ベトナムをはじめとする各国との共同研究を一層推進し、医薬品等の研究開発に貢献してまいります。

【ハノイ医科大学との連携について】

ハノイ医科大学と臨床研究センターとの連携は、2021年12月にJIHS（当時はNCGM）が主催した国際感染症フォーラムの講師としてハノイ医科大学のウー・クオック・ダット医師にご登壇を依頼したところから始まりました。2024年のMOUの締結、2025年のARISEへの正式加盟を経て、AMR（薬剤耐性）の観察研究、アデノウイルス感染症、エンテロウイルス感染症の疫学研究など、共同研究を実施する機会は年々増加しています。今後も良好な関係のもとで連携を深めてまいります。



オープニングセレモニーの様子



プレートの除幕式



フー・トゥ・グエン学長と JIHS 連携オフィスでの一枚

令和8年度 感染症危機管理リーダーシップ研修（長期）



IDCL（感染症危機管理リーダーシップ研修）は、次なる感染症危機に備え、公衆衛生行政、医療提供体制、感染症疫学や臨床等に関する専門的な知見や経験を有する多様な職種の感染症専門人材を対象とした研修です。地域における将来の感染症危機への対応においてリーダーシップを発揮できるよう、感染症危機管理に必要な多様かつ分野横断的な知識やスキルの修得、維持・向上を図ることを目的としています。今回は主に4～6月の活動をご紹介します。

4
22

開講式

JIHSにて開講式が執り行われました。式には武井貞治理事、俣野哲朗理事、四柳宏理事をはじめ、多くの機構幹部が列席し、期待と激励の言葉を贈りました。今年度は神奈川県、埼玉県、滋賀県から選出された3名を研修生として迎え、1年間にわたるプログラムが始動しました。



後列左から：齋藤智也センター長、杉浦亙センター長、山田康秀部長、高橋未明次長、今井健二郎課長、近藤徹参事
前列左から：厚生労働省 五十嵐美徳課長補佐、四柳宏理事、研修生の中井綾さん、石田若葉さん、田上健吾さん、武井理事、俣野理事

..... <<<各受け入れ機関において実践研修（OJT）がスタート!>>>

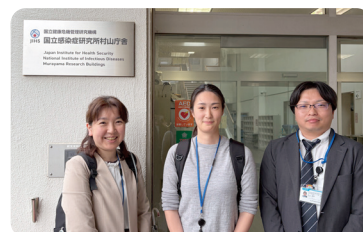
4
27

村山庁舎

新型インフルエンザの検査体制やキャンパスの概要、バイオセーフティ、一種病原体に関する専門的な講義を受けました。さらに、BSL4 実験室などの施設見学も実施され、最新の感染症対策の現場を肌で学ぶ、充実した滑り出しとなりました。



三木祥治主任研究員から BSL4（バイオセーフティレベル4）実験室の説明を受ける研修生



長期研修生ら（村山庁舎の入口にて）

5
8

ハンセン病研究センター

阿戸学センター長と森修一氏による講義および資料館見学の研修を実施しました。隔離政策下の食糧難や断種といった過酷な歴史をたどることで、公衆衛生における人権尊重の重要性を再認識しました。歴史と医学の両面から、専門職としての高い倫理観と実学的な視点を養う、有意義な研修となりました。



（次頁へ続く）

5
20

結核研究所

加藤誠也所長をはじめ、各研究室や国際協力の第一線で活躍される研究者の方々から活動状況を伺いました。所内視察では、図書館に保管される貴重な文献にも触れ、日本の結核対策の歩みとその奥深い歴史について理解を深めました。

5
25

薬剤耐性研究センター

大西真医師、他4名の講師から、センターが担うサーベイランスや耐性菌バンクの運用、ASIARS-Net※を通じた国際的な連携活動についての講義を受けました。さらに施設見学も交え、日本における薬剤耐性菌に対する取り組みへの見識を広げました。

※ ASIAn Antimicrobial Resistance Surveillance Network の略。アウトブレイクの検知及び院内感染対策の効果に関するデータを全国の医療施設から収集し、任意の国が利用できるように英語化した Web システムのこと。

6
2

統括庁 OJT

講師：吉村健佑医師（千葉大学病院 次世代医療構想センター長 特任教授）

テーマ：「感染症危機における「行動する」パブリックヘルス - 県庁の病床調整・空港検疫・ワクチン啓発の現場から -」

内閣感染症危機管理統括庁の研修へ参加しました。研修では、千葉大学病院の吉村健佑医師による講話が行われ、千葉県における新型コロナウイルス流行時の対応を振り返りました。公衆衛生の本質は「課題を分析すること」ではなく「社会課題の解決に向けて行動すること」にあるとお話いただきました。また、次の感染症危機に備えるためには、平時から人材育成、データ活用、訓練、物資備蓄、関係機関の連携体制を整備し、公衆衛生専門職が現場で主体的に行動することが重要であるご講義いただきました。



吉村健佑医師（写真左から2番目）と IDCL 長期生

6
26

机上演習

JIHS 内で机上演習が開催され、IDCL※¹ 長期研修生、FETP※²、CMTP※³、IDES※⁴、京都大学ヘルスセキュリティセンター、IDCL 修了生が参加しました。感染症危機を想定したシナリオをもとにディスカッションを行い、感染症危機時における組織的な動きや対応、危機管理体制の構築・維持、そしてその重要性等を学びました。

※1 感染症危機管理リーダーシップ研修 ※2 実地疫学専門家育成コース
※3 災害危機管理専門家育成コース ※4 感染症危機管理専門家養成プログラム



浦西由美先生
（徳島県美波保健所
副所長）



演習の様子

6
22
7
1.2

外部研修

合計3日間にわたり、千葉県衛生研究所で「感染症発生時における疫学調査等に係る職員研修」が行われました。研修では、地方自治体における同研究所の役割や業務内容の説明に始まり、施設の見学や業務の法的根拠についての講義などが行われました。その特性を十分に理解してからワークショップに参加したことで、感染症危機発生時における同研究所の役割や行動を実践的に学ぶことができました。



左から千葉県衛生研究所感染症学研究室の門倉圭佑様、折目郁乃様、石田篤史様、右3名は IDCL 長期生



新生JIHSが支える アジア太平洋地域の健康危機管理

6月11日、マレーシア・クアラルンプールで開催されたAsia Pacific Health Security Action Framework (APHSAF) 会合において、JIHSは世界保健機関（WHO）西太平洋地域事務局の一員として、会議運営および技術的議論の支援に携わりました。APHSAFは、アジア太平洋地域の各国政府、公衆衛生機関、国際機関などが協力し、感染症や自然災害などの健康危機への備えと対応能力の強化を目指す地域的な枠組みです。

今回の会合では、健康危機対応人材の育成と動員、危機発生前から対応体制を整備する運用即応性、そしてマルチソースサーベイランス（MSS）が主要なテーマとして議論されました。特に、平時から人材・情報・組織をつなぎ、危機発生時に迅速かつ効果的に機能する体制を整備することの重要性が共有されました。また、新たな組織や仕組みを作るのではなく、既存の制度やネットワークを効果的に結び付ける「相

互運用性」の考え方も強調されていました。

日本からは厚生労働省およびJIHSが参加し、急性呼吸器感染症サーベイランスやゲノムサーベイランスなど、日本が培ってきたMSSの経験を共有しました。多様な情報を統合し、リスク評価や迅速な意思決定につなげる取組への関心は高く、日本の経験がアジア太平洋地域の議論に貢献していることを実感しました。

こうした議論は、2025年4月に国立感染症研究所と国立国際医療研究センターが統合し一つになったJIHSの方向性とも重なります。研究、医療、公衆衛生機能、危機管理対応を併せ持つJIHSは、今回議論された運用即応性や相互運用性を体現する組織とも言えます。

感染症や健康危機は国境を越えて広がるからこそ、一つになったJIHSが日本とアジア太平洋地域をつなぐ健康危機管理の中核機関として、アジア太平洋地域の健康安全保障に貢献していく役割の重要性を改めて認識しました。





理事長と若手職員の交流会を開催

1月6日、2月13日、5月12日に、国土理事長と若手職員・学生の交流会を開催しました。

JIHS発足に伴い、専門性やキャリアの異なる職員が一組織として新たな目的や目標を達成するためには、チームワーク形成が重要となっています。その環境整備の一環として、研究を担う若手職員と機構幹部との意見交換の場として本会が催されました。

会には様々な部門から参加者が集まりました。

第1回には国立感染症研究所職員、第2回は職員に加えて所内で研究を進める大学院生、さらに第3回は国立国際医療研究所、国立国際医療センター職員が参加し、「研究環境の具体的な改善提案」「より魅力的な研究職の処遇、キャリア

パスの提案」「研究現場の生の様子や困っていること」「ワクチンや血液製剤の品質管理業務の重要性」など、幅広い意見が共有されました。また、継続的に若手と幹部との情報交換を行う重要性を参加者一同で確認しました。

本交流会開催は、今後、国立感染症研究所の学生・若手団体であるGreen Scientist Clubとの連携を進めることにより、若手と幹部に加えて若手同士の交流促進にも向けた、JIHS職員の交流基盤となりました。

JIHSでは今後も多くの職員が多角的に交流し、前向きかつ率直な意見の共有を行い、その使命を達成するべく努力してまいります。

第1回



国立感染症研究所職員が参加
【2026年1月6日、本部キャンパス(西)】

第2回



国立感染症研究所の職員と研究生が参加
【2026年2月13日、本部キャンパス(西)】

第3回



国立感染症研究所、国立国際医療研究所、
国立国際医療センターの職員と研究生が参加
【2026年5月12日、本部キャンパス(西)】





「世界の看護の現在地と未来-SoWN2025 からみる世界と日本の看護-」を開催

5月31日、日本語仮訳版「世界の看護2025」のお披露目として、ウェビナー「世界の看護の現在地と未来-SoWN2025 からみる世界と日本の看護-」を開催しました。

同報告書は、2025年5月にWHOが公表した“State of the World’s Nursing 2025”について、国際医療協力局が国内のWHO協力センター3機関（国立保健医療科学院、聖路加国際大学、兵庫県立大学地域ケア開発研究所）および笹川保健財団と連携し作成したものです。

当日は、WHOからのメッセージに始まり、上記の機関に加え、厚生労働省医政局看護課および日本看護協会より「日本の看護の現状・課題・将来展望」について、さらにそしてグローバルに活動している看護師らから「未来を担う看護のリーダー

シップ」についてのご発表をいただきました。質疑応答では、日本における看護リーダーシップの役割や制度・政策への関わり方、看護師の処遇改善、他職種との格差、キャリアのあり方などについての質問も寄せられ、活発な議論が交わされました。

本会は、世界と日本の看護の「今」を知り、これからの看護や自分自身の未来像など、多くのことを考える貴重な機会となりました。



ウェビナーに登壇する池本めぐみ局員(左)と虎頭恭子局員(右・前)

「世界の看護2025」は下記からご覧いただけます。

<https://kyokuhp.jihs.go.jp/.../who/2025/Sekainokango2025.pdf>

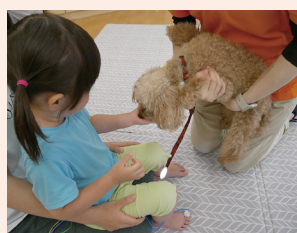


セラピードッグ訪問

6月12日に今年度最初の、7月3日に2回目のセラピードッグ訪問がありました！

来てくれたのは「はっぴー」と「みらい」の2頭です。はっぴーとみらいは、2025年から当院の小児科病棟を訪問してくれているセラピードッグで、こども達の気持ちにそっと寄り添ってくれるプロフェッショナルです。初めてセラピードッグたちに触れ合う子にも、以前会ったことのある子にも、おなかや背中を預けて“撫でられ待ち”の姿勢をとってくれ、こどもたちが手を伸ばす勇気を後押ししてくれました。生まれて初めて犬と触れ合った子も、じっくりセラピードッグたちとふれあい、自分の手のひらでおやつをあげられるまでになっていました。

こどもたちから「(セラピードッグ達には)なにができるの?」と質問があると、華麗なフラフープくぐりやお手、ぐるぐるした動き、高速移動など、様々な特技を披露して会場を沸かせていました。



散歩の時間では、こどもたちの歩みに速度を合わせながら、さりげないエスコートをしていたセラピードッグたち。こどもたちが作った工作の作品にも鼻を近づけるサービスぶりでした。

今年度はあと3回開催が予定されています。次回はどんなふれあいの時間になるのでしょうか。運営スタッフも楽しみにしています。



企画・発行
国立健康危機管理研究機構 広報管理部
〒162-8655 東京都新宿区戸山1-21-1
TEL: 03-3202-7181 (代表)
URL: <https://www.jihs.go.jp/>



バックナンバー
こちらから
ご覧いただけます

